

わたししの京都

河野裕子

暮らしの小物たち―三年坂など

いつのまにか暮らしの身めぐりに何となく寄ってきて、持ち主のからだの一部のように馴染んでいく小物たち。ふとした何でもない折にそれらの小物を手にとってしみじみ眺めることがある。どうしておまえさんは此処にきて、わたしと暮らすあんばいになったのかねえと呟いてやりたくなる。今回は、京都で買ったそんな小物を二つ、三つ。

何年前か前、朝ごはんを食べながらテレビを見ていると、コンコンチキチンの祇園囃子とともに祇園祭の行列のようすが映しだされた。へー、もう祇園祭かと画面を見ながら箸を動かしていたが、急に祭りの現場に行ってみたくなった。わたしはこれまでに一度も祇園祭を目のあたりにして見たことがなかったから

である。まだ間に合うやろうかと永田に聞くと、ああと言う。娘の紅と大急ぎで支度をして出かけた。

市役所のあたりに着くと、河原町通りの方から、いろいろな山鉦が鉦を鳴らしながらゆつくり進んでくる。人出にもまれながら河原町通りを下がって行くことにした。どの山鉦も趣向を凝らしているが、わたしは山鉦よりもそこに乗って身振りをしたり、笛をふいている人たちの浴衣に惹かれた。どの浴衣もなんとさっぱりと粋な男らしい柄だろう。出ているのはすべて男性ばかり。祇園祭は男の祭りなのだ。

河原町通りを歩きながら一軒のお店に気がついた。女性用の小物を扱う店である。ちょ

っと入ってみよ、と言って入ったのは、浮かれた祭り気分のせいだっただろう。ガラスケースのなかには扇子が並んでいる。扇子買ってみよか、という気になって、紅と一本ずつ買った。淡いべに色の撫子の花の絵のほうは紅に、桔梗や萩をあっさり描いたものはわたしに。

店の女主人は話し好きで、この扇子は宮脇売扇庵の品だと教えてくれる。そういえば、いつかテレビで扇子の老舗を紹介していたことがあったつけ。魅屋町だったと思う。

このとき買った扇子は重宝して、すっかり身になじんだものとなった。いつのまにかお醤油やコーヒーのしみがついて、折り山のところもすり減りかけていて、人前でつかうの

は恥ずかしくもあったが、新しいのを買う気にはなれなかった。それをどこかで無くしてしまつたと気がついたときは、変に落ち着かなかつた。上等の品ではないが、わたしにはあの扇子がいちばんいい。

おなじ品を国際会館の売店で見つけたときはうれしかった。扇子はよく出し入れするから、よくわすれる。この二本目もよそに置いてきたが、場所はわかつている。高知で講演をしたとき、椅子のうえに置いてきてしまつたのである。問い合わせをしたら、すぐに送つてくださった。

秋草を青く描きたる京扇子和紙につつまれ風の日戻る

〔歌壇〕(平成十二年十一月号)

今、その頃の歌を読みかえしてみると、扇子が返つてきたのは九月二十一日のことだつた。その翌日、京大病院で癌であることを知らされた。晴れた風の強い日にわたしは、返つてきた扇子をもう一度自分のものにするこゝとができて、次の日に起こることも知らず無邪気に喜んでいたのである。

小物のもうひとつは筆入れ。これも紅と一緒に買ったもの。紅が大学に入った年、受験から解放され、大学生活が楽しくてしようがない彼女に誘われると、わたしも青春時代をもう一度生き直している気分になり、どこにでもついていった。今から思うと、われながら可愛らしく、楽しい時代だつた。

京都に住んでいながら、わたしたちは京都の名所という所あまり行つたことがない。

一回、清水寺に行つてみようと言ひ出したのはどつちだつただろう。おのぼりさん気分地元を歩くのも新鮮でいいものである。三年坂(産寧坂)は両側にいろいろな店が並んでいて、出たり入つたりしているうちに気持がだんだんハイになつてくる。

袋物や、きれ地を扱う小さな店があつた。縮緬ちぢめんや友禪でこしらえた小物の数々に夢中になつた。日本の文様が懐かしく美しく思われたのは、実家が呉服屋であつたせいかもしれない。この店で小さな印鑑入れと眼がね入れを買つたのは、今考えても正解である。眼がね入れは筆入れとして使い、何年も使い続けて上の方の四分の一は布がすり切れ、無くなつてしまつて、下地だけの無残な姿になつてしまつている。

縮緬地に花柄や葉が染めてあるが、元の色がわからないほど汚れている。何度買い替へようと思つたかしのれないが、どこのお店に行つてもこれ以上の筆入れが見つからない。「三年坂にもう一度行こ」と紅を誘うが、彼女はなかなか乗つてこない。母子でうきうきと出かける年齢はお互いに過ぎてしまつた。年齢だけではない。体力も時間も分け合えるほどの余裕が、いつのまにか無くなつてしまつただ。

(かわの・ゆうこ「塔」選者)